

平成11年度
文化庁 日本語教育研究協議会

< 発題資料 >

学習者を知る

－学習者の日本語習得－

第3分科会

「多様なニーズへの対応方策（1）－教育内容・方法について－」

平成11年 8月24日

大阪大学

学習者を知る

—学習者の日本語習得—

第一部 発題の内容

- 1 . 第二言語習得の理論的背景 3
- 2 . 学習者の母語の影響 5
- 3 . 教室指導と自然環境の習得 6
- 4 . 誤用と誤用訂正 8

第二部 詳しく勉強したい方々へ 10

参考文献紹介 12

引用文献一覧 13

第一部 発題の内容

1. 第二言語習得の理論的背景

1 - 1 言語研究の流れ

【対照分析研究】 ・ 学習困難点は L 1 と L 2 の違い
..... ・ 誤用は避けるべきもの

【誤用分析研究】 ・ 誤用の分析
(母語の違う学習者から同種の誤用出現)

「学習者には学習者の言語体系 (= 中間言語) が存在する」
(Selinker, 1972)

【中間言語研究】 ・ 誤用は必然的なもの
..... ・ 習得順序
..... ・ 化石化
..... ・ 習得の要因 etc.

1 - 2 第二言語習得の理論・モデル

(a) モニター・モデル (Krashen 1981, 1982)

学習－習得仮説 学習は意識的な過程で、習得は無意識に覚える過程であり、
両者は互いに独立した過程である¹。

モニター仮説 学習によって体系的に学んだ文法知識は、発話や作文を訂
正したり、変更したりするモニターの働きを持っている。

自然順序性仮説 大人でも子供でも、学習者の母語にかかわらず、教える順
序が異なっても、文法には一定の習得順序がある。

¹ Krashen は、この独立した過程である「学習」と「習得」は、互いに交わることがないと主張し、教室指導の場面で得られる「学習」は「習得」に影響を与えることはないとする彼の考え方は「ノン・インターフェイスの立場」であり、「学習」と「習得」には関連性があるとする考え方は「インターフェイスの立場」であるという。

入力仮説 インプット仮説ともいう。言語を習得するためには、理解可能なインプットを受けることが必要であり、第二言語習得に効果的なインプットは、 $i + 1$ （現在よりも少し上）のレベルのものである。

情意フィルター仮説 学習者がインプットを取り込むためには、学習者自身の情意フィルターが低いこと（つまり、不安がなく、動機が高く、自信のある状態）が必要であり、高いと習得は遅くなる。

ナチュラル・アプローチへと応用 (Krashen & Terrell, 1985)

(b) 普遍文法理論 (Chomsky 1981, White 1989)

【第一言語の習得の場合】

子供の発話 *No go. (= I do not go.)

 *I goed. (= I went.)

これらは、インプットから刺激を受けて言語を習得しているとは言えない証拠。

すべての子供の頭脳に、ある普遍的な原理が備わっている。 普遍文法

母親の言葉に触れると、ある言語の基本的文法が形成される。 核心文法

発達が進んでくると、ある言語の文法体系が形成される。 個別文法

【第二言語の習得の場合】

三つの考え方：

(a) 普遍文法が、第一言語習得と同様に 第二言語習得にも 作用する。

(b) 少し 第二言語習得にも 作用する。

(c) 普遍文法は、第二言語習得には 作用しない。

2 . 学習者の母語の影響

2 - 1 言語転移とは？

正の言語転移

負の言語転移 母語干渉

母語と目標言語相互に影響しあう・・・cross linguistic influence

2 - 2 言語転移の影響の強弱

- 例1 * 囚人はかんごくから来ました。
- 例2 ? すみません、3枚きっぷください。
- 例3 ? 来週、両親が日本に来ます。いいことですね。
- 例4 ? 田中先生が日本語を教えました。
- 例5 ? 私は中日両国人民の友好ために一生懸命勉強します。
-
- 例6 * 風邪をひいたんですから、学校を休みました。
- 例7 * 私は国際交流会間で住んでいます。
- 例8 * 来週からアルバイトを始めます。
- 例9 * 北海道に行って、とても楽しかった。
- 例10 A : 昨日、駅で留学生の友達に会ったのよ。
* B : あの人は、どこの国の人？

2 - 3 母語による媒介語の使用とその影響

母語による媒介語使用の利点

母語による媒介語使用の欠点

3 . 教室指導と自然環境の習得

【問題の発端】

Dulay & Burt (1973) や Krashen (1981, 1982) などの研究では「習得を可能にするためには、自然な目標言語との接触が不可欠であり、教室指導の学習は習得には影響を与えない。」と報告された。

3 - 1 英語習得の場合 (Pica 1983)

対象：スペイン語を母語とする学習者

教室環境：メキシコの学校で英語を学ぶ学習者

自然環境：学校に通わないでアメリカで英語を自然に学ぶ学習者

混合環境：二つの環境を融合させた環境

教室環境	規則を過剰にしようとする誤りが多い。 例 He buyed a car yesterday. I don't understanding these people.
自然環境	~ing や -s のような文法形態素を省略するが多い。 例 There are many town in the U.S.
混合環境	初級レベルの学習者は自然環境に近く、上級レベルでは教室環境のような結果が出た。

教室環境は文法形態素を常に意識している傾向が見られる。

3 - 2 ドイツ語習得の場合 (Ellis 1989)

対象：イギリスの英語話者

教室環境：イギリスでドイツ語（語順のルール）を大学で学ぶ学習者（5グループ）

自然環境：ドイツでドイツ語を第二言語として学んだ学習者

授業では、グループ毎に、テキストでの出現順位・強調度の順位を変えて行う。

どのルールが授業で先に教えても、語順ルールの習得順序は変わらなかった。
しかし、このルールを学習者は数ヶ月で習得した。

教え方が違って、習得順序は同じだった。 教室指導の影響なし
自然環境では数年かかるので、教室指導は習得速度に効果がある。

3 - 3 日本語習得の場合 (森本, 1997)

対象：日本に滞在する日本語学習者

教室環境：日本で日本語学校に通う中国語とスペイン語話者 3人

自然環境：タガログ語話者の日本人妻 3人

教室環境	<ul style="list-style-type: none"> ・中級レベル：滞日期間 平均 1年3ヵ月 ・接続表現の使用が少なく、一文が短い。 例 ~ました。~ました。~ました。
自然環境	<ul style="list-style-type: none"> ・中級レベル：滞日期間 平均 8年2ヵ月 ・接続表現の使用が多く、一文が長い。 ・終助詞(「ね」)が不自然に多用される。 例 幼稚園はね、迎えあるじゃない、連れていったり、あれしにね、今はあんまりないね

3 - 4 まとめ(これまでの研究から)

教室指導は、習得順序には影響を与えない。

教室指導は、習得の速度を速め、より高いレベルの熟達度を促進する。

教室指導は、自然な口頭表出につながる効果を持たないが、文法テストなどの正確さを向上させる効果はある。

4 . 誤用と誤用訂正

4 - 1 自然な習得の道すじ

【否定表現】	第一段階	No you are playing here.	前に付加
	第二段階	Mariana not coming today.	中に付加
	第三段階	I can't play that one.	
	第四段階	He didn't said it.	
【コソア】	第一段階	ソ コの誤用	
		A : 小学校のときに、やさしい先生がいたのよ。 B : この先生は女の先生?	
	第二段階	ソ アの誤用	
		B : あの先生は女の先生?	
	第三段階	ソ ソ 正用	
		B : その先生は女の先生?	
	第四段階	アの新しい使い方	
		B : 小学校の先生って、あれだよ、やさしい先生が多いよね。	

4 - 2 安全な誤用と危険な誤用

- 例 1 * 今日、学校、行くじゃないです。
例 2 * 本が つくえの上に です。
例 3 * 本が 上のつくえに あります。
例 4 * 映画はとてもおもしろいだった。
例 5 * 教室の中に待っていきましょうか？

「誤用は、学習者が仮説を検証しようとしているあかしである。

誤用は、教師にとっても研究者にとっても学習者自身にとっても意義があるもの。」

(Corder, 1967)

誤用は成長の印

ある種の誤用は自然に消失する

化石化した誤用に要注意する

例 * 雨だからかさを持っていったのほうがいいです。

? 先生、コーヒー飲みたいですか？

4 - 3 誤用の訂正

どんな誤用訂正が効果的なのか？

A : 友達といっしょにアパートで住んでいます。

先生 1 : ああ、友達といっしょにアパートに住んでいるの？ (正用を示す)

先生 2 : 友達といっしょにアパートで住んでいる？ (繰り返す)

先生 3 : えっ？もう一度。

先生 4 : アパートで？ (誤用部分だけを取り出す)

先生 5 : 「で住んでいる」は、まちがっているよ。正しいのは？ (注意する)

先生 6 : 「住んでいる」は、「で」をとらないよね、「に住む」がたっだしいよね。

(説明する)

初級レベルでは、誤用であることを明確に示して訂正するほうが効果的

中上級レベルでは、正用を示したり、さりげなく注意を促すことで訂正が可能

誤用訂正の諸注意

- ・ 誤用の種類（何を訂正するか）
- ・ 授業の内容や状況（いつ訂正するか）
- ・ 学習者の性格（だれに訂正するか）
- ・ 訂正の方法（どんな風に訂正するか）
 - 状況によっては、学習者に考えさせる。
 - 頻度の高い誤用の対策を考えておく。

アパート（ ）住んでいる
 アパート（ ）借りる
 アパート（ ）パーティをする
 アパート（ ）着いたら、電話してください。

そして、後で・・・

- ・ なぜ間違ったのかを考えてみる。
 - 例 1 教師：ここは、「勉強する」じゃないですね。「勉強します」です。
 - 例 2 教師：陳さん、あなたは夏休みにどこに行きたいですか？

第二部 もう少し詳しく勉強したい方々へ

1 . 第二言語習得の理論的背景

Q 1 他にも第二言語習得の理論やモデルがありますか？

A 1 はい、いくつかのものを紹介しましょう。参考文献もつけておきますから、興味のある人は、読んでみてください。

- 1) シューマンの文化変容モデル (Schumann 1978)
- 2) マックウィニーのコンペティション・モデル (MacWhinney & Bates 1989)
- 3) アウトプット仮説 (Swain 1985)

また、相互交渉仮説 (Long, 1985) Processability Theory (Pienemann 1998) など、新たな仮説や考え方などが発表されています。

Q 2 第二言語習得に影響を与える要因にはどんなものがありますか？

A 2 次のような要因が考えられます。

年齢	母語	学習環境	動機づけ	認知スタイル
学習スタイル		適性	性格	

Q 3 第一言語習得と第二言語習得、その過程は似ているのですか？

A 3 これまでも多くの研究者が、この課題に取り組みましたが (Dulay & Burt 1973, 1974)、

研究によって類似しているという結果を示している場合 (Laufer 1990, Kanagy 1991) と、異なっているという結果を示している場合 (Bailey, Maiden & Krashen 1974, Larsen-Freeman 1975) があります。最近では第一言語と第二言語の習得は全く同一とは言えないことが報告されています (Eubank, Selinker and Sharwood-Smith 1995)。

2 . 母語の影響

Q 1 言語転移というのは、母語だけを指すのですか？

A 1 一般的には母語を指していますが、第二外国語を学ぶ場合に、第一外国語がその習得に影響を与える場合のように、学習者が目標言語を学ぶ以前に学んでいる外国語も含めて、それらが影響すると考えています (Odlin, 1989)。

Q 2 母語の影響には、どんな現象がありますか？

A 2 誤用となって表面に出る場合もありますが、使うことに自信がないので、できるだけ使わないですませる場合 (回避) もあります。たとえば、授受表現や受身などは母語に同様の表現がないために、学習者の使用は少なく、回避が起こっていると考えられています。

* 私の財布がとられました。(私は 財布を とられました。)

Q 3 第二言語習得の四技能によって、母語の影響の有無や程度の違いがありますか？

A 3 四技能と言語転移の関係では、話す技能では発音の面で母語の転移が観察されやすく、書きの技能でも同様の傾向があるようです。聞き取りと読みの技能の調査に関

しては、聞き取りのほうに母語の転移が顕著に現れているという報告があります。

3. 教室指導と自然環境の習得

Q 1 どのような指導が習得を促進するのでしょうか？

A 1 最近、「気づき」や「意識させること」が習得を促進させるという研究が多く出ています。つまり、単に文法説明をするのではなく、重要な部分を目立たせた形式で示したり（太字にしたりして）音声と文字の両方で情報を与えたりすることによって、学習者に「気づかせる」「意識させる」ことで、習得に効果をもたらす指導が注目を浴びています。英語では、Noticing, focus on form, consciousness raising などという用語が用いられ、研究が進んでいます（Rutherford & Sharwood Smith 1985, Schmidt 1990）。

Q 2 教室指導に関して、これまでの研究で明らかになっていることは他にもありますか？

A 2 教授期間が長いほど、また学習開始時期が早いほど、熟達度が高い。

4. 誤用と誤用訂正

Q 1 誤用の原因にはどんな要因が考えられますか？

A 1 ある研究者が以下のような原因があることを示しています(Selinker 1972)。

学習者の母語の転移

過剰一般化 ある一つの規則を別の語へも適用してしまう場合

例 元気+だった おいしい+だった

学習ストラテジー 学習の方法に問題がある場合

例 かたまりで覚えてしまう 飲んだ「のほうがいい」よ

訓練上の転移 先生が何度も練習させることで生まれる誤用

例 あなたは～ですか？ わたしは～です。わたしは～ます。

コミュニケーション・ストラテジー

例 使い方が分からないから、助詞の使用を回避する

Q 2 学習者は教師が誤用を訂正したことに気づいているのでしょうか

A 2 ある研究で、教師が行った授業を出席していた学生3人にビデオを見せて授業中に教師が行った誤用訂正(92ヶ所)に対してどれだけ気づいたかを報告させたところ、

24%の誤用訂正にしか気づかなかったことが報告されています(Roberts 1995)。レベルによっても異なると思いますが、初級ではなかなか誤用訂正を明確にしないと気づかれないようです。また、その時に気づいたとしても、それが誤用の消失に直結するものではないことを理解する必要があるでしょう。

参考文献の紹介

習得研究に興味を持って、少し読みたいなぁと思ったら・・・

- ・ [特集 中間言語研究] (1993) 『日本語教育』 8 1号
- ・ [日本語学習者の文法習得] (1999) 『平成 11 年度日本語教育学会春季大会予稿集』

もう少し、専門的なことも読んでみたいなぁと思ったら・・・

- ・ 水野光晴 (1995) 『外国語習得 その学び方 100 の質問』 研究社出版
- ・ ロッド・エリス著 金子朝子訳 (1996) 『第二言語習得序説 - 学習者言語の研究 - 』 研究社出版

もっと、頑張ってみようと思ったら・・・

- ・ 山岡俊比古 (1997) 『第 2 言語習得研究 < 新装改訂版 > 』 桐原ユニ
- ・ ダイアン・ラーセンフリーマン & マイケル・ロング著 牧野高吉ほか訳 (1995) 『第 2 言語習得への招待』 鷹書房プレス
- ・ 第二言語習得研究会 『第二言語としての日本語の習得研究』 凡人社 (第二言語としての日本語習得研究のジャーナル)

引用文献：

- Bailey, N., C. Madden and S. Krashen (1974) Is there "natural sequence" in adult second language learning? *Language Learning* 24/2, pp. 235-243.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris
- Corder, P. (1967) Significance of learner's errors. *IRAL* 5. pp. 161-170.
- Dulay, H. and M. Burt (1973) Should we teach children syntax? *Language Learning* 23/2, pp. 245-258.
- Dulay, H. and M. Burt (1974) Natural sequences in child second language acquisition. *Language Learning* 24/1, pp. 37-53.
- Ellis, R. (1989) Are classroom and naturalistic acquisition the same? A study of the classroom acquisition of German word order rules. *Studies in Second Language Acquisition* 11. pp. 305-328.

- Eubank, Selinker and Sharwood Smith (1995) *The current state of Interlanguage - Studies in honor of William E. Rutherford*. John Benjamins Publishing Company
- Gass, S. and C. Madden (eds.) *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Kanagy, R. (1991) Developmental sequences in the acquisition of Japanese as a foreign language : The case of negation. Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania.
- Krashen, S. (1982) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. Oxford:Pergamon
- Krashen, S. (1983) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon
- Krashen, S. and T. Terrell (1985) *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford: Pergamon
- Laufer, B. (1990) 'Sequence' and 'order' in the development of L2 lexis: Some evidence from Lexical confusions. *Language Learning* 40/3, pp. 281-296.
- Long, M. (1985) Input and second language theory. In S. Gass and C. Madden (eds.)
- MacWhinney, B. and E. Bates (1985) *The Crosslinguistic Study of Sentence Processing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pica, T. (1993) Adult acquisition of English as a second language under different conditions of exposure. *Language Learning* 33/4, pp. 465-497.
- Pienemann, M. (1998) Developmental dynamics in L1 and L2 acquisition: Processability Theory and generative entrenchment. *Bilingualism*. 1/1, pp.1-20.
- Roberts, M. (1995) Awareness and the efficacy of error correction. In R. Schmidt (ed.) *Attention & Awareness in Foreign Language Learning*, Honolulu: Univ. of Hawaii at Manoa. pp. 163-182.
- Rutherford, W. and M. Sharwood Smith (1985) Consciousness raising and Universal Grammar. *Applied Linguistics* 6/2. pp. 274-282.
- Schumann, J.H. (1978) *The Pidginization Process: A Model of Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Schmidt, W. (1990) The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics* 11/2. pp. 129-158.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *IRAL* 10:209-231.
- Swain, M. (1985) Communicative Competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass and C. Madden (eds.)
- White, L. (1989) *Universal Grammar and Second Language Acquisition*. Amsterdam:

John Benjamins.

ご質問やご意見などございましたら、ぜひお知らせください。

〒739-8523
住所 東広島市鏡山 1 - 1 - 2
広島大学教育学部
電話&FAX 0824-24-6866
メール (管理者削除)
迫田久美子